

ピカソ…やっぱりあいつは悪魔だった ～恋人ドラ・マールからのラブレター～

パブロ・ピカソ…あの男は私にとって一体何だったのでしょうか？

パリのカフェで、初めてピカソに会った日、私は奇妙なナイフ遊びを披露したのよ…。

薔薇刺繍の黒手袋を脱いで、テーブルの上に手を広げた。

そして尖ったナイフで指の間を素早く順番に突き刺して見せたわ。

少し失敗した傷口から血が滴ったけれど、私は平然とナイフを動かし続けたのよ…。

あの頃の私は長い黒髪を後ろに束ね、その面長な白い顔に自信を持っていたの。

男を魅惑するくらいの神秘さは湛えている…そんなプライドかしらね。

案の定、ピカソは直ちに接近してきたわ…。

当時、ピカソは相変わらず周囲の女たちに手を焼いていたようね。

初めて正式な結婚をしたオルガは、もうすでにバレリーナの見る影もなく…ロシア貴族末裔の面影すらなかった。

ピカソが離婚をしようにも、オルガは絶対許さなかったし…結局、国籍や法律の問題でどうにもならなかったのよ。

しまいには、オルガに財産の半分、いや一切合切持って行かれそうな気配でもあったからね。

厄介だったのは、オルガがどこまでもまとわりついて罵詈雑言を浴びせ、さすがのピカソも滅入っていたようね。

超ナイスボディのマリィ＝テレーズは、子供を産んでからは、もうピカソ好みの肉体じゃなかった。

そうなれば、アートにも文学にも興味のない彼女とは、もう何ら会話の材料も無いようだった。

ピカソはオルガのヒステリーに手を焼き、子育てしか目のないマリィ＝テレーズにはすっかり飽き飽きしていた。

…そんな時に私はピカソに出会ったのよ。

当時、私はシュールレアリストの写真家として自立していたし、たくさんのお前衛アーティスト達とも付き合っていたわ。

私はフランス語やセルビア語の他にスペイン語も話せたから、ピカソは母国語で話せるととても喜んだのよ。

初めて、女と芸術や哲学や政治の議論が出来る…とも言っていたわ。

ピカソはこうして私に夢中になったの…。

でも、彼はもともと本を読むようなタイプじゃなかった。

理論的な言葉も持たなかったし、政治にもたいして関心がなかったようね。

どちらかと言えば、日々の制作の中で自分の言葉を見つけていくタイプかしら…。

ただ、彼は交わる画家や詩人たちのどんな言葉も直ちに理解し、自分の言葉に変えてしまう優秀な頭脳を持っていたわ。

当時、パリは世界の文化の中心だったから、おびただしい数の才能たちがパリに集まっていた。

彼はそのおびただしい知識人達と交わる事で、知識人になったようなもののなの…。

私はピカソに多くのものを与えたはずよ。

シュールレアリズムやダダなど前衛芸術の思想も、政治との関わりも…。

でも結局、ピカソは形而上的なものは合わなかったようね。

彼にはね…日常の目に見える世界だけが、想像力の源だったのじゃないのかしら。
私がピカソと親密になったちょうどその頃、パリ万博の壁画制作の仕事が舞い込んだ。
そしてその後、フランコ軍のゲルニカ爆撃が起きたのよ。
故郷スペインの内戦ぼっ発には、ピカソも熱くならずにはいられなかった。
彼は気が狂ったように「ゲルニカ」の制作に没頭したし、私もその過程を写真に収め続けたわ。
本当のところ、私が作品のアドバイスもしたし、政治的な助言もしたのよ。
ピカソったら急速に政治的な人間になっていったわ。

「ゲルニカ」は世界中の絶賛を浴び、気がついたら「ゲルニカ」はひとつの神話になっていた…。
そして第二次大戦中、多くの知識人たちがアメリカに逃亡したのに、ピカソはパリに留まり続けた。
それでピカソは戦後、英雄になっていた。
共産党にも入党して、彼のハトは平和のシンボルにまで祀り上げられたわね。
だけど、彼は政治に目覚めたのでもなかったし、英雄になったのでもなかった。
ただ、自己顕示欲の権化になっただけなのよ。

ピカソは私の前で「俺は神様だ」とうそぶいたの。

「神様だったら自分でそんなことを言う訳がない」と私は言い返したわ。

でも、世間ではピカソという神話が創られつつあった。

特にアートの世界では、すでに誰も「帝王」に背くことができなくなっていたわ。

ピカソは「神様」になっていたのよ。

「ベッドの上では英雄なんぞ一人としていない」とはよく言ったものね。

私の前で目覚める朝は、自分の才能に悩み、いつも死と老いを恐れていたし、日々、食事や酒に気をつかうリアリストであったわね。

闘牛士のような肉体ではあったけれど、身長 160 センチくらいの小男でもあったのよ。

でも、いったん街に出ると傲慢な「神様」に変身してたわ。

ところで、私は傍目には知的で冷静で落ち着いた女に見えるようね。

だけど、心の中はなぜかいつも不安定なのよ。

自信ありげにしゃべった後なんかは、よく鬱々とした感情に襲われるの。

ピカソは「お前はいつもヒステリックに泣いているやつだ」と言っていたね。

そして、ものすごい勢いで私をモデルに「泣く女」を描いていったわ。

折しも、周囲では友人のシュールレアリストたちがどんどん戦場に送られていた…。

そしてフランコやスターリンの出現で、10代から信じてきた前衛思想も政治理想も、いとも簡単に吹っ飛んでしまい、私が少しおかしくなっていた時期よ。

そんな時に、21歳のフランソワーズ・ジロが62歳のピカソの前に現れたの。

フランソワーズはとても知的な女性だったし、若く美しく…そして私と違って肉感的だったのよ。

20代の小娘がピカソの子供を産んだわ。そして、私はボロ屑のように捨てられた。

やがて、私は精神に異常をきたし、自分でもどこで何をしているか、全く分からない状態になってしまった。

私は精神病院に入れられたわ。

あんなにも華やかでプライドの高かった私が、こんな不様な姿になるとわね。

私は周囲のアーティストたちに助けられ、ジャック・ラカンという有名な精神科医のおかげで、無事、この世界に舞い戻ることができた。

でも、私はすでに昔のドラ・マールではなかった…。

ピカソの若い頃の恋人…フェルナンド・オリヴィエやエヴァたちのことは、私にもよく分からない。
ただ、オルガ以降の女性たちのことは、私なりにずっと見続けてきたつもりよ。
オルガはピカソという放蕩者を正式に結婚させたね。
彼の身なりを整えさせ、華やかな社交界にもデビューさせた。
だけどやがて、彼は虚飾だらけの世界から逃げ出し、オルガからも逃げ出した。
それで、オルガの精神は尋常でなくなった。
子供を盾に死ぬまで離婚を拒否し、莫大なお金も要求し続けた。
けれど、息子は出来が悪く、孫も遺産のもつれで自殺してしまったというわけ…。
マリィ＝テレーズは毎夜、ピカソの欲望のままに身を任せ続けた。
彼の子供を産んで幸せでもあったわ。
別れた後も愛娘マイヤを連れてピカソと会うことも出来たしね。
でもやっぱり、彼女もピカソを追って自ら死を選んだ。
彼女は彼女なりのやり方で愛を全うさせたのね。
ただ、フランソワーズ・ジロだけは私や他の女たちのようにピカソに溺れることがなかった。
彼女はピカソを利用する賢さも持ち合わせていたし、最初からピカソの犠牲者になるまいと自覚して

いたようね。

だから、時期が来たらピカソを捨てることだって出来たのよ。

別れた後は、彼女の画家としての名声にも役立てることが出来たし、ピカソとの日々を暴露本で書くこともできたからね。

70歳過ぎのピカソと一緒にになったジャクリーヌの方は、どうだったかだっけ？

彼女はピカソのアイデアの源泉ではなかったけれど、彼の完璧なマネージャーだったね。オルガの死後は、妻の座も獲得できたし、莫大な遺産も相続できた…。

そんな現実主義者の彼女だって、ピカソ亡きあと自殺してしまったとは…ね。

ピカソが手切れ金として私にくれたのは、南フランスは山間の村メネルブの、一軒の大きな館だった。彼自身もフランソワーズも住んだことのある館で、彼がたった一枚の油絵で手に入れた代物だそうね。その館は由緒ある四階建ての風変わりな建物だったけれど、すでに朽ち果ててあちこちの部屋で壁が剥がれ落ちていたわ。

暗く湿っぽくてサソリがベッドにまで現れた…。

でもね、奥の部屋にはピカソの色んな作品が散らばっていたわ。

私はこの南フランスでも、色んなアーティストたちとの交わりには積極的に顔を出したつもり…。

でもね、館に戻るといつも孤独だった。

ジェームズ・ロードという若いアメリカ人作家が私を愛してくれたこともあったわ。

彼はとても気遣いの繊細な優しい男でねえ。

でも、彼はホモセクシャルだったのよ。やっぱり私は孤独だったわ。

ところで、私が邪魔になったあの日、ピカソは私に向かってこう言ったのよ。

「お前を女だと思ったことは一度だってなかったなあ。知性があって色んな話のできる男としか思っていなかったのだよ」…とね。

私はあの時、あいつを激しく激しく憎んだ。

そう…憎んだはずだった。

が、その後いつしか、あいつは私の中で、拭うことのできない悪魔となっていたのよ。

私の前では、あいつは一人の貪欲なサディストに過ぎなかったわ。

でも同時に、絶えず挑戦し続ける頼もしい芸術家でもあった。

日々、壊し続けては…日々、作り続けたね。

周囲から何と言われようが、ただひたすら作り続ける…そう、やはり悪魔だったのね。

そして、ヘンなことに私はあの悪魔から離れられなくなっていたのよ。

はたして、あいつを愛しているのか、それとも憎んでいるのか、私にもよく分からない。こんな感情は、若いときの前衛アーティスト達との交流でもなかったし、ジョルジュ・バタイユの愛人だった頃にもなかった感情なの。

あの頃、私はまだ若かったし、頭でっかちでもあったからね。

そんな孤独の日々があっという間に流れ去り、やがて、残酷な老いだけが私を襲ってきたわ。

そして誰にも知られず、ひっそりと死を迎えた…。

気がついてみると、あいつと関わったどの女たちより、私は長生きしていた。

そしてなんと奇妙な偶然でしょうね！

私はあの悪魔と全く同じ寿命を生きたことになるのよ！

私が死んだあと、私の所蔵品が競売に掛けられたそうね。

新聞の報道によると 31 億 5 千万円以上あったというじゃありませんか。

美しく誇り高かったはずの私はね…生前、館の中のあいつの絵を売れば、どんどんお金が入ってくる
ことくらい、もちろん知っていたわ。

私は女王様みたいにもっと美しく着飾り、この館をお城のように変身させることだって出来たはずね。
だけど、悲しいかな、私はあいつとの思い出の詰まった作品を、そう安々と手放すことができなかったの。

.....

でもね…

こうして、こちらの死の世界にやって来てしまったというのに、私はいまだにあの悪魔を忘れられないのかしら？

そして、あの悪魔をやっぱり愛しているのかしら…？